

Title	F.リストの忘れられた婚礼
Sub Title	F. Liszt's forgotten "Sposalizio"
Author	福田, 弥(Fukuda, Wataru)
Publisher	三田哲學會
Publication year	2004
Jtitle	哲學 No.111 (2004. 3) ,p.61- 91
JaLC DOI	
Abstract	The most famous version of "Sposalizio" of Franz Liszt (1811-1886) is one for the piano solo, known as the first tune of "Annes de pelerinage, deuxieme annee, Italic", which was first published in 1858. But Liszt arranged it later to a few of versions. At present with regard to these later versions, six manuscripts are known, which are preserved in Goethe- und Schiller Archiv in Weimar. In the work-list in "The New Grove Dictionary of Music and Musicians, second edition" [work-list nummber: J44], only two versions (the vocal version with organ and the vocal version with piano 4 hands) are referred to, while in Raabe's Liszt-Catalogue only one version (organ or harmonium version with ad libitum vocal part) is referred. In both the data about these versions are confused and inconsistent. In this article the author tries to indicate the exact data of all later versions of "Sposalizio" and introduce a forgotten version. According to the investigation of the author, the abovementioned six manuscripts were completed in the following order : first "GSA60/Y2" was completed, secondly "GSA60/R7", thirdly "GSA60/V33", then "GSA60/S13" or "GSA60/S13.1" and at last "GSA60/R7.1", three of which [Y2, R7 and V33] are authentic sources. As a result it is clear that "Sposalizio" has three versions besides the piano solo versions: the version for vocal part with organ, for vocal part with piano 4 hands and for organ solo. Though in his Liszt-Catalogue Raabe had indicated that it is doubtful for Liszt to arrange the last two versions, the author proved that these were really composed by Liszt himself. Especially the organ solo version is valid one (not annulled by Liszt) and a intermediate one between the piano solo version in "Italie" and the vocal version with organ or piano 4 hands. It has been ignored in any catalogues of Liszt's works and is a forgotten version until today. Moreover neither the title "Ave Maria" mentioned in both catalogues nor the German text was written by Liszt, and surely Liszt has never indicated that the vocal part is ad libitum.
Notes	投稿論文
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00150430-00000111-0061

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the Keio Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

投稿論文

F. リストの忘れられた《婚礼》

福 田 弥*

F. Liszt's forgotten "Sposalizio"

Wataru Fukuda

The most famous version of "Sposalizio" of Franz Liszt (1811-1886) is one for the piano solo, known as the first tune of "Année de pèlerinage, deuxième année, Italie", which was first published in 1858. But Liszt arranged it later to a few of versions. At present with regard to these later versions, six manuscripts are known, which are preserved in Goethe- und Schiller Archiv in Weimar. In the work-list in "The New Grove Dictionary of Music and Musicians, second edition" [work-list number: J44], only two versions (the vocal version with organ and the vocal version with piano 4 hands) are referred to, while in Raabe's Liszt-Catalogue only one version (organ or harmonium version with ad libitum vocal part) is referred. In both the data about these versions are confused and inconsistent. In this article the author tries to indicate the exact data of all later versions of "Sposalizio" and introduce a forgotten version.

According to the investigation of the author, the above-mentioned six manuscripts were completed in the following order : first "GSA60/Y2" was completed, secondly "GSA60/R7", thirdly "GSA60/V33", then "GSA60/S13" or "GSA60/S13.1" and at last "GSA60/R7.1", three of which [Y2, R7 and V33] are authentic sources. As a result it is clear that "Sposalizio" has three ver-

* 慶應義塾大学文学部, 明治学院大学文学部, 昭和大学非常勤講師

F. リストの忘れられた《婚礼》

sions besides the piano solo versions: the version for vocal part with organ, for vocal part with piano 4 hands and for organ solo. Though in his Liszt-Catalogue Raabe had indicated that it is doubtful for Liszt to arrange the last two versions, the author proved that these were really composed by Liszt himself. Especially the organ solo version is valid one (not annulled by Liszt) and a intermediate one between the piano solo version in “Italie” and the vocal version with organ or piano 4 hands. It has been ignored in any catalogues of Liszt’s works and is a forgotten version until today.

Moreover neither the title “Ave Maria” mentioned in both catalogues nor the German text was written by Liszt, and surely Liszt has never indicated that the vocal part is ad libitum.

序

フランツ・リスト (1811-86) の異稿問題は、作品の成立過程を研究するうえで、きわめて重要となるばかりでなく、彼の作品概念とも密接に結びついている問題である。改訂稿が、改定前の稿と同一曲とみなせるのか、あるいは類似した曲ないし別の曲とみなすべきなのか、常に考慮しなくてはならないのである。というのも、曲名や演奏形態が異なっているにもかかわらず、同一作品の異稿とみなせる場合がたびたびあるからだ。リストの「作品」に認められる、こうした流動的な要素は、彼の作曲方法と大きく関係していると思われる。彼は、スケッチにスケッチを重ねたうえで最初の自筆譜を作成するのではなく、むしろ自筆譜を書きながら細部を決定していったと考えられるため、必然的に曲はどんどん変化していく。いったん完成した楽曲をのちになって改訂することは、ごく当たり前のことであり、なかには初稿から 40 年以上経ってから改訂が行われた場合さえある。また作品の出版後に改訂を加えることも珍しいことではなかったため、彼の作品は出版された稿が決定稿とは言えない。また、ある楽曲の主題が別の楽曲に転用された例は枚挙に暇がない。さらに、彼の改訂は同一

編成の場合にとどまらず、異なる編成のために行われることもしばしばあり（この場合は、編曲とも言える）、その際に曲名が変えられることも決して珍しくなかった⁽¹⁾。その結果、大多数の彼の作品には複数の稿が残されることとなったのである。つまりリストの改訂は、しばしば編曲と密接に結びついており、その場合、当然ながら編曲稿は作品の成立過程においてきわめて重要な位置を占めることになる。

現在、こうしたきわめて複雑な状況の体系化をめざした新しい作品目録が準備されており⁽²⁾、その作品目録と共通の番号を用いたニューグローヴ音楽事典第2版の作品表⁽³⁾において、以前のラーベとサールによる作品表⁽⁴⁾が大幅に訂正されるに至った。また、本稿で考察の対象とするオルガン曲に関しては、ハーゼルベックが編纂した『リスト・オルガン全集』⁽⁵⁾の校訂報告⁽⁶⁾において多くの有益なデータが示された。

《婚礼 Sposalizio》は、ピアノ独奏のための《巡礼の年第2年イタリア》⁽⁷⁾ [A55] 第1曲として、1858年に出版された作品である。パリ社交界の花形として知られたマリー・ダグー伯爵夫人(1805-76)とともにイタリアに滞在していた1837-39年に、リストは、文学、絵画などのさまざまな芸術作品に接し、そこから題材をとってこの曲集は作曲された。第1曲《婚礼》は、聖ヨゼフと聖母マリアの婚礼の場面を描いた、ラファエロ(1483-1520)の《マリアの婚礼 Lo Sposalizio della Vergine》からインスピレーションを受けて作曲された宗教的な作品である⁽⁸⁾。これまでこの曲は、その題材とラファエロの作品との関係から、様式研究を通じてさまざまに解釈されてきた⁽⁹⁾。しかし本論の目的は、この曲のさらなる解釈にはない。本論は《婚礼》のピアノ独奏稿以外の稿を考察の対象とし、これまでほとんど言及されたことのない新たな稿の存在を明らかにするものである。

「リストはいつもサン-サーンスのオルガン演奏を高く賞賛していまし

F. リストの忘れられた《婚礼》

た。サン＝サーンスが、ラファエロの絵画による…《巡礼の年イタリア》の《婚礼》を一音一音オルガンで演奏するのを聴いて、巨匠 [リスト] は、この愛すべき音詩に、オルガンと女声合唱による新しい稿を作りました」。これは、リストの弟子、ゲレリッヒ (1859–1923) が 1908 年に発表したリストの評伝の一節である。さらに彼は、この「新しい稿」が 1890 年 10 月にニュルンベルクで初演され、1891 年 7 月 30 日にバイロイトのカトリック教会において合唱付きで再演されたと述べている⁽¹⁰⁾。

ピアノ独奏稿以外の稿について、前述の主要な 3 つの作品目録に示されているデータを以下に記そう。ここに記すように、これらの記載内容は相互に異なっており、データの混乱が認められる。

まずニューグローヴ音楽事典第 2 版の作品表では、ピアノ独奏稿以外の稿を一括して「J44」という番号のもとにまとめ、次のように記されている。

《ラファエロの同名の絵画による婚礼（宗教的な婚礼音楽、アヴェ・マリア）Sposalizio [Trauung] nach dem gleichnamigen Bilde Raphael's (Geistliche Vermählungsmusik; Ave Maria)》

アルトのユニゾン合唱、またはアルト独唱とアルト合唱、及びオルガンまたはピアノ 4 手用。1883 (?) 年作曲。

次にラーベの作品目録では、「任意の女声合唱 1 声部とアルト独唱付きのオルガンまたはハルモニウムのための “Zur Trauung. Geistliche Vermählungsmusik”」と書かれており、作曲は 1883 年となっている。さらに「オルガン独奏稿と声楽付きのピアノ 4 手稿は、リストによる編曲かどうか疑わしい」と言及されている⁽¹¹⁾。

一方、サールの作品表では、「任意の女声合唱ユニゾン付きのオルガンまたはハルモニウムのための “Zur Trauung (Ave Maria III)”」作曲は 1883 年とされている⁽¹²⁾。

以上の 3 つの作品データを比較してみると、改めて記載内容が相互に

異なっていることがわかる。大きな相違として、ニューグローヴ第2版の作品表のみがアルト独唱を伴わないアルトのユニゾン合唱のみによる演奏の可能性を示していること、ニューグローヴとサールでは《アヴェ・マリア (III)》という副題が付されていること、ラーベとサールでは、合唱が任意とされていること、さらにハルモニウムによる演奏の可能性が示されていること、ラーベのみ、オルガン独奏稿と声楽付きピアノ4手稿がリスト以外の人物によって編曲された可能性を示唆していること、などを指摘できよう。

本論では、資料批判を通じて、これらの稿に関する正確なデータを整理・提示し、上記の3つの作品表の修正を試みたい。ラーベが指摘した「オルガン独奏稿」の詳細に関しては、今日までまったく言及がなく、任意の女声合唱を単に除いただけの稿であるのか、それとも別の稿が存在するのかは不明のままであった。本論は、この稿と声楽付きのピアノ4手稿がリストの真作であることを初めて論証するものである。

なお、曲名や編成の指示に関する混乱は、現代の印刷譜においても認められる。

『フランツ・リスト音楽作品集』（旧全集）には、任意のアルト独唱とソプラノ及びアルトのユニゾン合唱付きのオルガン稿が収録されている（譜例1参照）⁽¹³⁾。この楽譜は、リストの自筆譜（“GSA 60/R7”）をもとに校訂された。曲名は、“Sposalizio-Trauung / nach dem gleichnamigen Bilde Raphaels: / Ave Maria III / für Orgel oder Harmonium mit Gesang nach Belieben.”である。

ハーゼルベック編のオルガン全集には、アルト独唱とソプラノ及びアルトのユニゾン合唱付きのオルガン稿が含まれている⁽¹⁴⁾。歌詞は「アヴェ・マリア」のみ。ここで編集校訂のために使用された楽譜は、“GSA

60/R7”と“GSA 60/R7.1”である。ハーゼルベックは、「この作品は、1890年にブライトコプフ・ウント・ヘルテル社においてゴットシャルクによって編集された。しかしこの印刷譜は、変更、付加、削除が多く、ここでは資料として援用することはできなかった」と述べている⁽¹⁵⁾。

作曲年については後述するので、ここでは3つの作品表とハーゼルベックが示したデータを確認するにとどめる。ラーベとハーゼルベックは、声楽とオルガンのための稿の作曲時期を1883年8月7日としている。サールでは単に1883年と記載され、ニューグロヴ第2版の作品表では「1883年(?)」とされている。この根拠は、ゴットシャルク⁽¹⁶⁾ (1827-1908) の日記における「8月7日、リストは彼のピアノ曲《婚礼》をオルガンのために編曲した」(1883年の項目) という記述である⁽¹⁷⁾。

1. 現存する《婚礼》の手稿譜

手稿譜の記述を行う前に、初版について述べておきたい。初版は、リストの死後、1890年にブライトコプフ・ウント・ヘルテル社から出された⁽¹⁸⁾。旧全集は、初版には多くの変更と追加、誤りがあると、具体例を挙げながら指摘しており、さらに初版の刊行に携わったゴットシャルクがドイツ語の歌詞“Geist der Liebe, segne uns!”を付加したと述べている⁽¹⁹⁾。没後出版であることも考慮に入れると、この初版の信憑性は低いと判断されるため、本論では考察の対象から外した。

さて、《婚礼》に関わる手稿譜は現在8点が知られており、いずれもヴァイマルのゲーテ・ウント・シラー・アルヒーフが保管している。そのうちの6点がピアノ独奏以外の稿である。いずれの資料にも日付は書かれておらず、“GSA 60/R7”以外には、リストのサインもない。以下にその6点を掲げる⁽²⁰⁾。最初に各資料に書かれている曲名を示し、それから資料の説明を行う。さらに各資料の信憑性についても論じたい。なお混乱を避けるために、以下に記す小節数は、とくに断りのないかぎり、旧全集

の小節数（ハーゼルベック版も同じ）に相当する個所を表すものとする。

＜オルガンを含む稿＞（計3点）

○ GSA 60/R7 自筆譜，全8葉⁽²¹⁾

“Sposalizio - / (Trauung) / nach dem gleichnamigen Bilde Raphael's/ F. Liszt”（リストによる．焦茶色のインク）“Oder: Die Trauung, Geistliche Vermählungsmusik/ für Orgel (Gesang / ad libitum)”（ゴットシャルクによる．焦茶色のインク）

この自筆譜の曲名は，リストとゴットシャルクによって書かれているが，ゴットシャルクの書き込みは，リストの書いた“F”の文字にかぶさる形で上から書かれているため，明らかにリストの後から書かれたものである．声楽が入る86小節目の箇所には，反復記号がつけられ，“Das 2te mal treten [sic.] mehrere Sopran und Alt Stimmen / im Chor, pianissimo, unissona [sic.] ein - / selbstverständlich, ohne Männer Stimmen -”とリストは書き込んでいる．その下段には，“~~Frau~~ / Engel / Stimmen/ Sopran und Alt”と書かれていたが，焦茶色のインクで抹消し，新たに“Altstimme Solo”と書いている．つまり，86-101小節をアルト独唱（当初は，天使の声部としてソプラノとアルトを考えていた）で歌った後，2度目の反復（102-117小節）では，ソプラノとアルトのユニゾン合唱によってピアノで歌うべきことを指示している．リストが書いている歌詞は“Ave Maria”（焦茶色インク）のみであるが，そのすぐ下に，ゴットシャルクが“Geist der Liebe, segne uns”というドイツ語の歌詞を赤インクで書き添えている．後述するが，コーダ（130小節以下）は判然としない（譜例2参照）．

○ GSA 60/R7.1 筆写譜，全2葉

“Sposalizio - (Trauung) F. Liszt”

この筆写譜は，アルト独唱用のパート譜であるが，130小節以下にはオ

F. リストの忘れられた《婚礼》

ルガン・パートも書かれている。コピストは不明であるが、筆者の調査によれば“GSA 60/S13.1”と同一人物である。リストの手は入っていない。

○ GSA 60/Y2 筆写譜、全8葉

表紙 [f.1^r]: “Sposalizio/ von / Dr. Franz Liszt/ für/ die Orgel” (ゴットシャルクによる。焦茶色インク)

“(Nach den Klavierstück / gleiches Namens in den / Années Pelerinage I)/ Autograph” (不明者による。青クレヨン)

第「1」頁: “Sposalizio (die Trauung) Franz Liszt” (ゴットシャルクによる)

ゴットシャルクによって書かれた、オルガン独奏のための楽譜。この楽譜には、独唱・合唱声部は含まれない。赤クレヨンによる修正の仕方、さらには同じく赤クレヨンで書き込まれたページ数の筆跡は間違いなくリストのものであるし、なにより3箇所で数小節ずつ、リスト自身の変更を書き込んでいる。したがって、このオルガン独奏のための稿はリストの真作と言える。この合唱を伴わない稿は、ラーベの不明瞭な短い言及⁽²²⁾を除いて、これまでまったく無視されてきたもので、筆者の調査によって初めて真作であることが判明した。

問題はその楽譜テキストである。表は、各楽譜の小節の対応個所を示している。数字は、各楽譜の小節数を表す。なお『フランツ・リスト新全集』⁽²³⁾において出版された、ピアノ独奏稿の対応箇所も併記した。

ここに示したように、“Y2”は、旧全集で出版されている声楽とオルガンのための稿とはかなり内容が異なることが判る。基本的に作品の構成自体にはあまり差異はないのだが、随所に対応しない箇所があり、音価が変えられているので小節数も異なっている(譜例1と3を比較されたい)。この“Y2”の構成は、表の「新全集」、すなわち《巡礼の年第2年イタリア》第1曲のピアノ独奏稿ときわめて類似している。4箇所ほどピアノ独奏稿とは相違があるが、これはリストが修正を施したためである(“Y2”

の11-18, 29-31, 40-47, 98-100小節). 修正の一例を譜例4に示した.
オルガン曲のため, ペダル・パートを含めた3段の譜表で書かれており,
上2つの3段譜表はゴットシャルクの筆跡で, 一番下の3段譜表(8小
節)はリストの自筆による修正である.

表

ホ長調												
旧全集	1-2	3-6	7-10	11-12	13-16	17-20	21-32	33-40	41-43	x	44-59	60-61
			∨							∧		x
“Y2”	1-2	3-4	x	5-6	7-8	x	9,10	11-18	19-28	29-31	32-39	40-47
								x		x		∨
新全集	1-2	3-4	x	5-6	7-8	x	9-14	15-18	19-28	29	30-37	x

ト長調					ホ長調							
旧全集	62-67	68-73	74-77	78-85	x	86-99	100	————— 101				
		x		x	∧			x				
“Y2”	48-53	54-61	62-65	66-77	78-86	87-93	94-97	98-100	101-103			
新全集	38-43	44-51	52-55	56-67	68-76	77-83	84-87	88-89	90-91			

コーダ						
旧全集	102-115	116-124	125-127	128-129	130-133	134-145
		x		x		x
“Y2”	104-110	111-117	118-121	122-126	127-128	129-148
新全集	92-98	99-105	106-107	108-112	113-114	115-133

x: 対応していないことを示す

つまり“Y2”は, ピアノ独奏稿からの忠実なトランスクリプションに修正が加えられた, オルガン独奏のための手稿譜である. ただし自筆譜が存在しないため, 最初にリストがこの稿を作成したのか, それともゴットシャルクが最初に作成したのか判らない. つまり, ゴットシャルクが編曲

F. リストの忘れられた《婚礼》

した稿にリストが後から修正を加えた可能性も充分ありうる。

なお、この手稿譜には判然としない箇所がある。ピアノ独奏稿の 10-11, 13-14 小節に相応する箇所に、大きな波状形の線が赤クレヨンと青クレヨンで書かれている（譜例 4 参照）。もしこの線が当該する計 4 小節の削除を意味しているのであれば、ゼクエンツの繋ぎの箇所を削除することになり、旋律的にも和声的にもかなり違和感がある。

いずれにせよ、リスト自身の作曲であれ、ゴットシャルクとのコラボレーションによる作曲であれ、このオルガン独奏稿がリストの真作であることは疑いない。

< 声楽とピアノ 4 手のための稿 >（計 3 点）

この稿は、現在まで未出版である。

○ GSA 60/V33 自筆譜、全 2 葉

4 頁のみの断片。曲名が書かれた頁はない。紙の大きさ（縦長判、33.2×25.4 cm）、五線の色（濃青色）、トータル・スパン (282 mm)⁽²⁴⁾ は、“R7” と一致する。声楽パートはない。「8」「9」「10」と頁数をリスト自身が青クレヨンで書き込んでいる。つまり、1-7 頁は所在不明ということになる。4 段譜表で書かれ、3 箇所に“Ped”と書かれているので、この楽譜はピアノ 4 手稿である。これまでに、この自筆譜について言及した研究はない。

ここに書かれた小節は、旧全集（声楽とオルガンのための稿）の 86-129 小節に対応する。ただし、102-117 小節は反復記号で示されているので、実際に書かれているのは 28 小節である。この自筆譜には、第 1 ピアノ・パートは 86-93（反復箇所：102-109）と 120-129 小節に相応する箇所のみ書かれている。それ以外の 94-101（反復箇所：110-117）、118-119 小節は空白で、休符もない。つまり、この楽譜は“R7”とつぎ合わせることで、初めて曲の全貌が把握される。というのも、第 1 ピア

ノ・パートは、声楽とオルガンのための稿のオルガン・パートとほぼ同じ動きをしているので、リストは書くことを省略したと考えられるからである。そして“R7”と異なる箇所を含む場合に、リストは“V33”に書き込んだと考えられる。

コーダ部分（130 小節以下）も、リストは十分な余白があるにも関わらず、何も書いておらず、ただ“Piú Lento”と書いているだけだ。しかし、“S13”と“S13.1”を見ると、第2ピアノ・パートは“tacet”となっているので、“R7”のオルガン・パートをそのまま第1ピアノとして流用することが可能である。つまり“V33”は、決して未完成ということではなく、第1ピアノ・パートの94-101 (110-117), 118-119 小節の例を考えるならば、コーダ（130 小節以下）も省略してあるとみなすのが妥当である。同様に、この自筆譜には声楽パートも省略されていると考えられる。

○ GSA 60/S13 筆写譜, 全7葉

“Sposalizio - / (Die Trauung)/ nach dem / gleichnamigen Bilde / Raphael's / für / Orgel / (beziehentlich Altstimmen) / neu bearbeitet von / Franz Liszt / Arrangement für Pianoforte 4 Händen. (焦茶色インク)/ mit Singstimme (鉛筆)”

声楽とピアノ4手のための稿の筆写譜で、声楽パートは赤インクで書かれている。歌詞は“Ave Maria”のみ。リストの手は入っていない。コピストは不明。声楽パートの指示は、次の通りである。86小節目では“Alt-/stimme” “Solo”, 102小節目では“Mehrere Sopran-u. / Altstimmen im / Chor, unisono.”。

○ GSA 60/S13.1 筆写譜, 全9葉

“Sposalizio - / (Die Trauung)/ nach dem / gleichnamigen Bilde / Raphael's / für / Orgel / (beziehentlich Altstimmen) / neu bearbeitet von / Franz Liszt / Arrangement für Pianoforte 4 Händen.” (焦茶色インク)

F. リストの忘れられた《婚礼》

“S13”とは別のコピストによる筆写譜 (“R7.1” と同一人物). やはりリストの手は入っていない. タイトル頁の表記は, 上記のように, “S13”の焦茶色インクで書かれた部分とまったく一致している. 声楽パートの指示は, 86 小節目では “1 Alt = /stimme” “Solo”, 102 小節目では “Mehrere Sopran und Altstimmen im Chor, unisono.” となっており, 歌詞は “Ave Maria” のみである.

後半部分だけとは言え, 自筆譜 (“V33”) の存在が, 筆者の調査によって初めて確認されたので, この声楽とピアノ 4 手のための稿はリストの真作であることが明らかとなった.

以上のように, 《婚礼》のピアノ独奏以外の稿には, 声楽とオルガンのための稿, 声楽とピアノ 4 手のための稿, そしてオルガン独奏稿の 3 稿があり, いずれも真作である. 声楽とピアノ 4 手のための稿は, 初めてニューグローヴ第 2 版の作品表で真作として言及されたが, オルガン独奏稿が真作であることは, 筆者によって初めて確認された. またニューグローヴの作品表では, 声楽パートは, アルトのユニゾン合唱のみによっても演奏できると指摘されているが, 現存する手稿譜には, そのような可能性は示されていないことも判った.

リストの手が入っている手稿譜は, “R7”, “Y2”, “V33” の 3 点であった. その 3 点を中心にしながら, ここで曲名と演奏手段, 声楽パートへの指示について考察する.

“R7” にリストが記した曲名は, 《ラファエロの同名の絵画による婚礼 Sposalizio (Trauung)》である. そこにゴットシャルクが《あるいは, オルガン (任意の声楽) のための婚礼 Die Trauung, 宗教的な婚礼音楽》と書き込んでいた. “Y2” は《オルガンのための婚礼 Sposalizio (die Trau-

ung)》というゴットシャルクの表記のほかに、不明者が青クレヨンで《巡礼の年第1年のなかの同名のピアノ曲による》と書いている。しかしこの追記は、リストが修正を加えた後のものか、前のものか判らない（もちろん、「巡礼の年第1年」という記述は誤り）。“V33”には、曲名を含む頁は残されていない。ちなみに“S13”では、《リストによって新たにピアノ4手〔と声楽〕のために編曲された、オルガン（任意のアルト声部）のための、同名のラファエロの絵画による婚礼 Sposalizio (Die Trauung)》となっている。ところが、リストの没後に出た初版譜では《婚礼のために Zur Trauung, 宗教的な婚礼音楽》となり、旧全集では《オルガンまたはハルモニウムと任意の声楽のための、ラファエロの同名の絵画による婚礼 Sposalizio - Trauung, アヴェ・マリア III》とされてしまった。その根拠は示されていない。

“R7”におけるゴットシャルクの書き込みは、リストの後からなされたことはすでに検証した。その書き込みの後、リストがこの自筆譜に改めて目を通した可能性も否定できないものの、ゴットシャルクの記載は、リスト没後、初版のために彼が追加した可能性があり、その信憑性は低い。したがって、ゴットシャルクによる「（任意の声楽）のため」の「宗教的な婚礼音楽」という表記は、かなり疑わしい指示であると言えよう。少なくとも現存する手稿譜を調べたかぎり、初版の「婚礼のために Zur Trauung, 宗教的な婚礼音楽」という曲名は受け入れられない。

声楽パートへの指示は、“R7”（“S13”, “S13.1”も）では、アルト独唱とソプラノ及びアルトのユニゾン合唱（反復部分）と指示されている。しかしラーベとサールの作品表では、この曲の声楽パートが「任意」とであると指摘されている。これまでの資料批判から、この指示はリストによる表記ではなく、ゴットシャルクによる“R7”のタイトル頁への書き込みに依拠していることは明白である。したがって、アルト独唱とソプラノ及びアルトのユニゾン合唱を任意とすることは、かなり疑わしい指示であると考え

られる。

同様に、“Geist der Liebe, segne uns” というドイツ語の歌詞も、リストではなく、ゴットシャルクが書き込んでいるもので、信憑性は低い。

旧全集で《アヴェ・マリア III》としたのは、歌詞によるためと思われるが、これがサールの作品表にも受け継がれ、ニューグローヴ第2版の作品表にも記載されてしまっている。上記の検討から明らかなように、リスト自身はこの曲に《アヴェ・マリア》という曲名はつけていない。また“R7”にはペダル声部も書かれており、ラーベとサールが指摘しているハルモニウムによる演奏の可能性は考えられない。

2. 各手稿譜の比較検討

次に、現存する6つの手稿譜の成立過程を検討する。煩雑になることを避けるために、ここでは必要最小限の要点のみを指摘するにとどめる。

まず、“Y2”と“R7”の比較から始めたい。“Y2”の冒頭の8小節では、もともと2-3, 3-4, 6-7, 7-8小節にバスの音がゴットシャルクによって書かれていたが、リストはそれを赤クレヨンで削除している。そして、その削除を含む8小節が、じつは“R7”の第1ページに貼り付けられた紙の下に書かれている。また譜例4に示したように、“Y2”でリストは新たに8小節を書き込んでいるが、その新たに書かれた8小節は、“R7”では最初から書かれている音型ときわめて類似している。“R7”の第4ページは旧全集の41小節以降に相当するが、すべて赤クレヨンと青クレヨンで削除されている。その削除された音楽を見ると、音価の取り方が“Y2”と同じであることが判る。この部分は、改めて第5頁に書かれているが、そこでは倍の音価となっている。そのほか、“Y2”になされたリストの修正(29-31, 40-47, 98-100小節)は、“R7”には反映されていない。

“V33”の声楽パートが入る部分(86-91小節)には、紙を削って音符の修正が施されており、同様の修正は“R7”にも認められる(この修正跡

は、“S13”と“S13.1”にはない)。その一方で、“R7”の93小節目のオルガン右手パートにおいても、紙を削って音符が修正されており、その修正後の音符は、“V33”には初めから書き込まれた音符と一致している。したがって、86-129小節に関するかぎり、“V33”は“R7”の後に書かれ、両者が書かれた後に、リストは86-91小節の修正を行ったと考えられる。

“S13”と“S13.1”は、基本的に“R7”と“V33”の内容にしたがっているが、いくつかの異同が認められる。たとえば、“V33”では3箇所しか書かれていないペダル記号が“S13”と“S13.1”ではそれぞれ8箇所につけられているし、“R7”に認められる運指の数字やアクセント記号が書かれていないことがある。さらに、111小節目の第1ピアノ左手の最後の四分音符が“S13”と“S13.1”ではcisになっているが、“R7”ではeである。さらに、コードが“R7”とは異なる。このような異同は、“S13”と“S13.1”との間には認められない。

以上の比較から、“R7”は“Y2”の後に作成されたことが判る。まずゴットシャルクがオルガン独奏稿の楽譜を作成したが、それは《巡礼の年第2年》第1曲のかなり忠実なトランスクリプションであった。そしてそこにリストが修正を加えた(“Y2”)。次に声楽とオルガンのための稿を、リストが自ら書いた(“R7”)。その際、少なくとも冒頭と44小節以降の部分では、“Y2”を参考にしながら書き始めたことが判る。こうして完成した“R7”に、さらにゴットシャルクが「オルガン(任意の声楽)のための婚礼 Die Trauung, 宗教的な婚礼音楽」という曲名とドイツ語の歌詞などを追加したわけである。

声楽とピアノ4手のための稿の自筆譜“V33”(86-129小節のみ)は、“R7”の後に書かれた。この稿の筆写譜“S13”と“S13.1”は、“V33”と“R7”から直接写されたものではなく、2つの自筆譜(“R7”と“V33”)から筆写した手稿譜(“X”とする)が存在し、そこから筆写されたと推測さ

F. リストの忘れられた《婚礼》

れるが、現在、この“X”の所在は知られていない。“S13”と“S13.1”に関しては、同一内容のため、前後関係は不明である。最初の7頁分（1-85小節）の自筆譜が存在したことは間違いないので、声楽と4手ピアノのための稿が真作であることに疑いはないものの、厳密に言えば、自筆譜の所在が不明な1-85小節に関しては、“S13”と“S13.1”が自筆譜を正確に伝えているとは判断できない。しかし“S13”と“S13.1”は、この稿の全貌を今日まで伝える貴重な手稿譜ということになる。

コードについて

再三述べてきたように、2つの声楽稿（オルガン伴奏による稿とピアノ4手の伴奏による稿）のコード（130小節以降）には問題がある。

“R7”のコード自体が判然としないことはすでに指摘した（譜例2参照）。リストは少なくとも4回コードを書いてから、それらすべてを抹消し、新たにこの自筆譜の「10」頁に紙を貼り付けて13小節からなるコードを書いた。その段階では、声楽パートは最後の3小節のみで、142小節で曲を閉じるつもりであった。ハーゼルベック版の“ossia”が、この段階に当たる（譜例5a参照）。それからさらに、その3小節の上の部分に、張り付けた紙の余白を使って新たに赤クレヨンで追加している。しかしこの追加部分の音価と小節数は、インクの滲みと、リストの書き方が曖昧なためにはっきりと読めない。

一方、“S13”と“S13.1”では最後の声楽パートは4小節である（譜例5b参照）。そこに、前者は紙を削り取ることによって、後者は鉛筆で書き込むことによって、修正が加えられ、結果として両者は同じ音符となっている。この修正を、“R7.1”は初めから含んでいる。したがって“R7.1”は、“S13”と“S13.1”の作成後に書かれたことは明らかである。しかし、この3つの手稿譜はリストの手が入っていないため、リストがこの形でコードを確定したとは判断できない⁽²⁵⁾。

“Y2”は声楽稿よりも前の段階の稿であり、一方、“V33”のコードは省略されている。したがって現存する手稿譜からは、真正な声楽稿のコードは“R7”しか存在せず、この自筆譜も記譜が曖昧であるため、2つの声楽稿のコードは判然としないということになる。旧全集もハーゼルベック版も同じコードとなっているが（譜例 5a）、筆者が“R7”を検討したかぎり、両版とは異なっているように読める。参考までに、筆者の解読例を譜例 5c として掲げておく⁽²⁶⁾。

3. 《ゴットシャルク・レパートリー Gottschalg's Repertorium》

すでに述べたが、現存する手稿譜“Y2”からだけでは、オルガン独奏稿は最初からリストが書き下ろしたのか、ゴットシャルクの編曲にリストが手を加えたコラボレーションなのか判然としない。しかしふたりのコラボレーションと考えられているオルガン独奏曲はほかにも存在するため、筆者は後者の可能性が高いと推測している。ふたりのコラボレーションと考えられている曲を次に掲げよう⁽²⁷⁾。

《ダンテ『神曲』による交響曲から導入、フーガ、マニフィカト》[E8]
(1860 年作曲)

《アンダンテ・レリジョーソ》[E12] (1861-62? 年作曲)

《バッハのヴァイオリン・ソナタ BWV1017 からアダージョ》[E13]
(1861-63 年作曲)

《バッハの教会カンタータ第 21 番の「わが心には憂い多かりき」から導入とフーガ》[E9] (1860-66 年作曲)

《コンソレーション》から [E22] (1866-73? 年作曲)

《ハンガリー戴冠式ミサ》から「オッフエリトリウム」と「ベネディクトゥス」[F3] (1871 年作曲)

じつはこれらの曲はすべて、《ゴットシャルク・レパートリー》というオルガン曲集の一部を構成している⁽²⁸⁾。《ゴットシャルク・レパート

F. リストの忘れられた《婚礼》

リー》とは、「オルガン、ハルモニウムまたはペダル・ピアノのための」作品集で、パレストリーナ、ラッソ、ブクステフーデ、バッハ、ヘンデル、ハイドン、モーツァルト、ベートーヴェン、フンメル、シュポア、ヴェーバー、シューベルト、メンデルスゾーン、ショパン、リスト、ラフなどの作品から構成されており、多くは、オルガンのために編曲された稿である。3シリーズ36冊からなる曲集で、第1シリーズは1869年、第2シリーズは1873年、第3シリーズは1875/77年にライプツィヒのシューベルト社から出版された⁽²⁹⁾。さらに2シリーズ24冊も計画されたが、未出版に終わった。ゴットシャルクによる編曲が圧倒的に多いが、リストの編曲と記されている曲もかなりある。なかでも、上記の6曲のうち、《アンダンテ・レリジョーソ》と《コンソレーション》以外の4曲は、ゴットシャルクが書いた楽譜に、リストが修正を加えた手稿譜として今日まで伝えられている。

このことを考えると、オルガン独奏のための《婚礼》も《ゴットシャルク・レパートリー》のために作成された可能性がないとは言えないだろう。もちろん推測の域は出ないが、同曲集を考慮して“Y2”を作成したものの、何らかの理由で、結局は曲集から漏れてしまったのかもしれない。

結 語

以上の手稿譜調査から、《婚礼》のピアノ独奏稿以外の稿について、いくつかの点が明確となった。ニューグローヴ第2版の作品表は、ラーベとサールの作品表における不備をかなり訂正しているものの、それでも充分とは言えないので、ここで改めて整理しておこう（AからDのアルファベットは、筆者が成立年代順に便宜上つけたものである）。

編成	曲名	ニューグローヴ	初版
[手稿譜]		第 2 版の番号	
A) ピアノ独奏	《婚礼 Sposalizio》	[A55/1]	1858 年
[“GSA60/I15”]	（《巡礼の年第二年イタリア》第 1 曲）		
[“GSA60/I13.1”]			
B) オルガン独奏	《婚礼 Sposalizio (die Trauung)》	[未掲載]	未出版
[“GSA60/Y2”]	1883 年 8 月 7 日作曲？		
C) アルト独唱とソプラノおよびアルトのユニゾン合唱，オルガン			
[“GSA60/R7”]	《ラファエロの同名の絵画による婚礼 Sposalizio (Trauung) nach dem gleichnamigen Bilde Raphael's》		
	1883 年 8 月 7 日作曲？	[J44]	1890 年
D) アルト独唱とソプラノおよびアルトのユニゾン合唱，ピアノ 4 手			
[“GSA60/V33”]	[リストによる曲名は現存せず]	[J44]	未出版
[“GSA60/R7”]			

改めてまとめると，今日よく知られているピアノ独奏稿 (A) と声楽とオルガンのための稿 (C) だけでなく，オルガン独奏稿 (B) と声楽とピアノ 4 手のための稿 (D) も真作であることが確認された。ただし，D 稿の 1-85 小節に関しては，真正な手稿譜は現存しない。さらに 2 つの声楽稿 (C と D) においては，声楽を任意とする指示，及びドイツ語の歌詞，《宗教的な婚礼音楽 Geistliche Vermählungsmusik》という曲名は，リストではなく，ゴットシャルクが付した可能性が高い。《婚礼のために Zur Trauung》と，ニューグローヴ第 2 版の作品表にも記載されている《アヴェ・マリア》という曲名は，リストによるものではない。また声楽が，独唱を伴わず，アルトのユニゾン合唱のみによるという指示も同様である。

オルガン独奏稿 “Y2” は，オルガンと声楽のための稿より前に作成され

F. リストの忘れられた《婚礼》

たわけだが、無効とされた形跡はなく⁽³⁰⁾、いままで不当に無視されていたことになる。この稿の存在が明らかになったことで、作曲年にも疑問が生じてくる。これまで、声楽とオルガンのための稿は「1883年(?)」に作曲されたと考えられてきた。しかし、その根拠となっていたゴットシャルクの記述「(1883年) 8月7日、リストは彼のピアノ曲《婚礼》をオルガンのために編曲した」からは、これが声楽とオルガンのための稿(C)とオルガン独奏稿(B)のいずれをさしているのか、判断できなくなった。ゴットシャルクは声楽パートを任意であると考えていたので、彼のこの記述は不明瞭なものと言わざるを得ないからである。

現存する手稿譜からは、これらの稿の成立年代は特定できないが、成立過程は明らかになった。まず“Y2”が作られ、次に“R7”が作成された。そのいずれかの成立が、1883年8月7日であると考えられる。その後、“V33”が作られ、“X”を挟んで“S13”と“S13.1”が作成された。そして最後に“R7.1”が作成されたことになる。オルガン独奏稿(B)の唯一の手稿譜“Y2”については、《ゴットシャルク・レパートリー》との関連性を考慮しつつ、さらなる考察をしていく必要があるだろう。

1861年にローマに移り住んでからリストは宗教音楽の作曲に傾倒していくが、彼の多くの宗教的声楽曲にはオルガン稿が存在している。この意味でも、リストのオルガン曲は重要なジャンルであり、その研究なくして、彼の宗教的声楽曲の全貌も知ることはできない。リストのオルガン曲については、ニューグローヴ第2版の作品表とハーゼルベックの校訂報告が出版されたことによって、かなり詳しく知ることができるようになったが、本論で検討した通り、不明瞭な部分も少なからずあり、さらなる研究が望まれる。

註

- (1) たとえば、多くの改訂稿が残されている作品として、《ノンネンヴェルトの僧房》という曲が挙げられる。初稿（ピアノ独奏稿）は1840年の完成だが、その後1849年までに新たに2つのピアノ独奏稿が作られた。その一方で、1841-60年に計5つの歌曲稿が完成され、さらに1880年代になってから、新たなピアノ独奏稿とヴァイオリンまたはチェロとピアノのための稿が書かれている。つまりこの曲の場合、計11稿が存在することになる（さらに疑作稿が1つある）。曲名も《哀歌》、《アルバムの一葉》などと変えられている。

- (2) ブダペストのリスト記念館の館長マーリア・エックハルトを中心に作業が進められている。

なお、この作品目録とは別に、ハワードとショートによる以下の作品目録の刊行準備も進められている。

Leslie Howard and Michael Short, *Franz Liszt: A Catalogue of His Work*, New York, Pendragon Press. (in press)

- (3) ed. Mária Eckhardt and Rena Charnin Mueller, Franz Liszt, Work-list, in; *The New Grove Dictionary of Music and Musicians*, second edition, ed. Stanley Sadie, vol. 14, London and New York, Macmillan 2001, pp. 785-872.

本論では、この作品表の番号を曲名後の [] 内に付す。

- (4) Peter Raabe, *Liszt's Schaffen*, Stuttgart 1931, 2. Aufl. Tutzing, Hans Schneider 1968, S. 241-364.

Humphrey Searle, with Sharon Winklhofer, Liszt, in; *The New Grove Early Romantic Masters 1*, New York and London, Macmillan 1985, pp. 235-378.

- (5) Franz Liszt, *Sämtliche Orgelwerke*, hrsg. Martin Haselböck, 10Bde. und Supplement, Wien, Universal Edition 1985-1999.

- (6) Martin Haselböck, *Franz Liszt und die Orgel, Sämtliche Orgelwerke*, Bd. X/a, b, Texte, Wien, Universal Edition ca.1999.

この校訂報告書によって、リストのオルガン作品研究は新たな段階を迎えたと言えよう。

- (7) 全7曲のうち、第4-6曲《ペトルルカのソネット》のみが1846年に出版され、それ以外の4曲（《婚礼》を含む）に関しては、1858年版が初版であ

F. リストの忘れられた《婚礼》

る。ヴァイマル時代 (1848-61 年)、リストは交響詩をはじめとする管弦楽曲の新作を発表する一方で、それまでのピアニスト時代に書き連ねたピアノ曲や歌曲を改訂・出版した。たとえば、今日彼の代表作として一般に知られている《巡礼の年第 1 年スイス》[A159]、《詩的で宗教的な調べ》[A158]、《超絶技巧練習曲》[A172]、《パガニーニ大練習曲》[A173]などは、いずれもピアニスト時代に書かれた初期稿 [順に A40ab, A61, A8 と A39, A52] の改訂稿である。

- (8) ed. Ben Arnold, *The Liszt Companion*, London, Greenwood Press 2002, p. 84.

この絵は、現在ミラノのブレラ美術館に所蔵されている。

- (9) ラファエロの絵画との関係において、この曲を分析的に論じた近年の様式研究には以下の文献がある。

Joan Backus, *Liszt's Sposalizio: A Study in Musical Perspective*, in; *19th-Century Music* vol. XII/2, 1988, pp. 173-183.

Elizabeth Way, *Raphael as a Musical Model: Liszt's Sposalizio*, in; *Journal of the Liszt Society*, vol. 40, 1996, pp. 103-112.

- (10) August Göllerich, *Franz Liszt*, Berlin 1908, S.166.

彼はブルックナー (1824-96) の評伝の執筆者としても知られる。

- (11) Peter Raabe, S. 325.

ラーベ (1872-1945) は、1910-1944 年にかけてヴァイマルのリスト博物館の館長を務めた。現在ゲーテ・ウント・シラー・アルヒーフが所蔵しているリストに関わる手稿譜に、分類番号を付けたのも彼であり、彼の手書きのカタログが、いまだに当アルヒーフでは使われている。したがって当然ながら、本論で言及する資料について彼は知っていたことになる。

- (12) Humphrey Searle, with Sharon Winklhofer, p. 328.

- (13) Franz Liszt, *Franz Liszts Musikalische Werke*, hrsg. Franz Liszt-Stiftung, Leipzig, Breitkopf & Härtel 1936, V, Bd.VI, S. 21-26. 以下、本論では「旧全集」と記す。

- (14) Franz Liszt, *Sämtliche Orgelwerke*, Bd. IX, 1987, S. 44-49.

楽譜自体には書かれていないが、校訂報告においては、やはり声楽は「任意」とされている。

- (15) Martin Haselböck, Bd. X/b, S. 360.

- (16) アレクサンダー・ヴィルヘルム・ゴットシャルクは、1840 年代からのリストの弟子であり、コピストも務めたオルガニスト・作曲家。リストが交流したオルガニストのなかでも、とくに親密な関係にあった人物で、ふたりの親

交はリストが亡くなるまで続いた。ゴットシャルクは、1847年からヴァイマル近郊のティーフルトのカントルを務め、のちにはヴァイマルの大公妃音楽学校で音楽史も教えた。そしてリストの支援のもと、1870年にはヴァイマルの宮廷オルガニストになる。いち早くレーガー(1873-1916)の才能を見出した人物でもある。リストは親しみを込めて、彼のことを「伝説上のカントル *legendarischen Kantor*」と呼び、代表的なオルガン独奏曲《アルカデルトのアヴェ・マリア》[E14]、《バッハの「泣き、嘆き、憂い、おののき」と「ロ短調ミサ」の「十字架につけられ」の動機による変奏曲》[E17]、《システィナ礼拝堂の想起》[E15]を、彼に献呈した。後述するように、彼は《ゴットシャルク・レパートリー *Gottschalg's Repertorium*》という、古今の音楽作品によって構成されたオルガン曲集を出版している。

- (17) hrsg. Carl Alfred René, *Franz Liszt in Weimar und seine letzten Lebensjahre, Erinnerungen und Tagebuchnotizen von A. W. Gottschalg, Großherzogtl. Sächs. Hoforganist nebst Briefen des Meisters*, Berlin, Arthur Glaue 1910, S. 148.

さらにゴットシャルクは1884年の1月2日の項目で、「彼[リスト]にはいつもお金がありませんでした。誰かが着服していたのでしょうか。去年、彼が受け取った報酬は次の通りです。《婚礼》: 300 マルク」, ほか全6曲で「7300 マルク」と述べている。hrsg. Carl Alfred René, *ibid.*, S. 150.

- (18) “Breitkopf & Härtel's/Orgel-Bibliothek.” の1曲として, “Zur Trauung/Geistliche Vermählungsmusik” という曲名のもとに出版された。プレート番号は“18598”。ヴァイマルのアンナ・アマリア大公妃図書館に所蔵されているものを調査の対象とした。整理番号は“L823a/b”。アルト独唱とソプラノ及びアルトのユニゾン合唱を伴うオルガンのための楽譜である(声楽は任意とは指示されていない)。歌詞は二通りあり、それぞれ別の譜表に印刷されている。ひとつは“Ave Maria”の反復のみ、もうひとつは“Geist der Liebe, segne uns”というドイツ語の歌詞である。

ハーゼルベックによれば、初版年は1890年である。Martin Haselböck, S. 360.

また以下の文献からも、プレート番号が“18598”である印刷譜は1890年に出版されたと考えられる。

Otto Erich Deutsch, *Musikverlags Nummern*, Berlin, Merseburger, 1961, S. 10.

- (19) 旧全集, V, Bd. VI, S. VI.

- (20) ピアノ独奏稿の2点(GSA 60/I15 と GSA 60/I13.1)は、《巡礼の年第

F. リストの忘れられた《婚礼》

2年》第1曲の自筆譜 (GSA 60/I15) と、それを基にした筆写譜にリストが改訂を加えたもの (GSA 60/I13.1) である。この2点は本論では扱わない。ピアノ独奏稿以外の6点の詳細は以下の通り。

- GSA 60/R7 自筆譜, 全5葉, 各頁12段 (濃青色の五線)
記譜: 全頁
頁数: 「1」-「10」 (リストによる。赤クレヨン)
筆記具: 焦茶色インク, 赤インク, 赤クレヨン, 青クレヨン
縦長判: 33.2×25.4 cm (トータル・スパン: 282 mm)
透かし: なし
- GSA 60/R7.1 筆写譜, 全2葉, 各頁12段
記譜: f.1^r のみ
頁数: なし
筆記具: 焦茶色インク
縦長判: 33.4×25.2 cm
透かし: なし
- GSA 60/Y2 リストの修正付き筆写譜, 全8葉, 各頁14段
記譜: ff. 2^r-8^v, f.1^r: タイトル頁
頁数: 「1」-「14」 (リストによる。赤クレヨン)
筆記具: 黒インク, 赤クレヨン, 青クレヨン
縦長判: 34.0×27.8 cm
透かし: なし
- GSA 60/V33 自筆譜, 全2葉, 各頁12段 (濃青色の五線)
記譜: ff. 1^r-2^r, f. 2^v: 4声の別の合唱曲をゴットシャルクが筆写
頁数: 「8」-「10」 (リストによる。青クレヨン)
筆記具: 焦茶色インク, 赤クレヨン
縦長判: 33.2×25.4 cm (トータル・スパン: 282 mm)
透かし: なし
- GSA 60/S13 筆写譜, 全7葉, 各頁14段
記譜: ff. 1^v-7^r, f. 1^r: タイトル頁
頁数: 「1」-「12」 (リストによらない。焦茶色インク)
筆記具: 焦茶色インク (声楽声部: 赤インク)
縦長判: 35.2×26.2 cm
透かし: なし
- GSA 60/S13.1 筆写譜, 全9葉, 各頁12段
記譜: ff. 2^r-9^v, f. 1^r: タイトル頁

頁数:「1」-「16」(リストによらない)

筆記具: 焦茶色インク, 鉛筆

縦長判: 32.8×26.0 cm

透かし: なし

- (21) “R7” と旧全集及びハーゼルベック版との音高とデュナーミクの異同のみを以下に記す。ただしコードに関しては後述するので、ここでは記さない。

	“GSA60/R7”	旧全集	ハーゼルベック版
41 小節: 3 つ目の音	dis	dis	fis
85 小節: 左手の和音 (his, dis)	削除	なし	あり
95 小節: 4, 5 拍目の四分音符	fis, a	cis, dis	cis, dis
101 小節: 最後の四分音符	e	cis	cis
129 小節: デュナーミク記号	“p”	“p(p)”	“pp”

- (22) ラーベは、彼の目録において、ヴァイマルに保管されているオルガン独奏稿の「ゴットシャルクによる筆写譜」について言及し、「リストによる編曲かどうかは疑わしい」と指摘している。彼はこの“GSA 60/Y2”の存在を知っていたわけであるから(註 11 参照)、おそらくこの楽譜が、ラーベが言及しているオルガン独奏のための手稿譜であろう。
- (23) Franz Liszt, *New Edition of The Complete Works*, Series I vol. 7, Budapest, Editio Musica 1974, pp. 2-7. 以下、本論では「新全集」と記す。
- (24) トータル・スパンは、楽譜に引かれた五線のうち、最上段の譜表の第 5 線と、最下段の譜表の第 1 線との間隔を意味する。これが同じ幅であれば、同じ器具(ないし機材)を使って五線を引いたと考えられる。もちろん、決定的な証拠とまでは言い切れないが、ほぼ同時期に五線が引かれた可能性があることを示唆しよう。
- (25) ちなみに初版譜のコードは、いずれの手稿譜とも異なっている。
- (26) 楽譜校訂において、この問題はきわめて重要な問題であるが、本論の主旨には直接の影響を及ぼさないので、ここではこれ以上の考察は行わない。
- (27) 最後の曲[F3]のみ、オルガンとヴァイオリンのための編曲であり、それ以外の 5 曲はオルガン独奏曲である。
- (28) 順に、第 1 シリーズ第 7 冊, 第 8 冊, 第 2 冊, 第 1 冊, 第 2 シリーズ第 22 冊, 第 23 冊として出版された。
- (29) Michael von Hintzenstern, Franz Liszt und der Weimarer Organistenkreis, in; Martin Haselböck, *Franz Liszt und die Orgel, Sämtliche Orgelwerke*, Bd. X/a, b, Texte, Universal Edition ca. 1999, S. 421-434, here S. 428.

F. リストの忘れられた《婚礼》

現在、3 シリーズの印刷譜はブダペストのリスト記念博物館が所蔵している。整理番号は、“Ms. mus. L. 15/I, II, III”である。この3冊には、リストが目を通した跡が残されている。

- (30) たとえば、ピアノ独奏のための《アレルヤ》[A216/1]の自筆譜(GSA60/I 32)には、リスト自身によって「この手稿譜は有効ではない dieses Manuscript ist nicht gültig」と記されている。

譜例 1

Sposalizio - Trauung
nach dem gleichnamigen Bilde Raphaels:
Ave Maria III
für Orgel oder Harmonium mit Gesang nach Belieben.

Franz Liszt.
(Bearbeitet 1883)

Sehr langsam. M.M. $\text{♩} = 96$.

Orgel.

p dolce

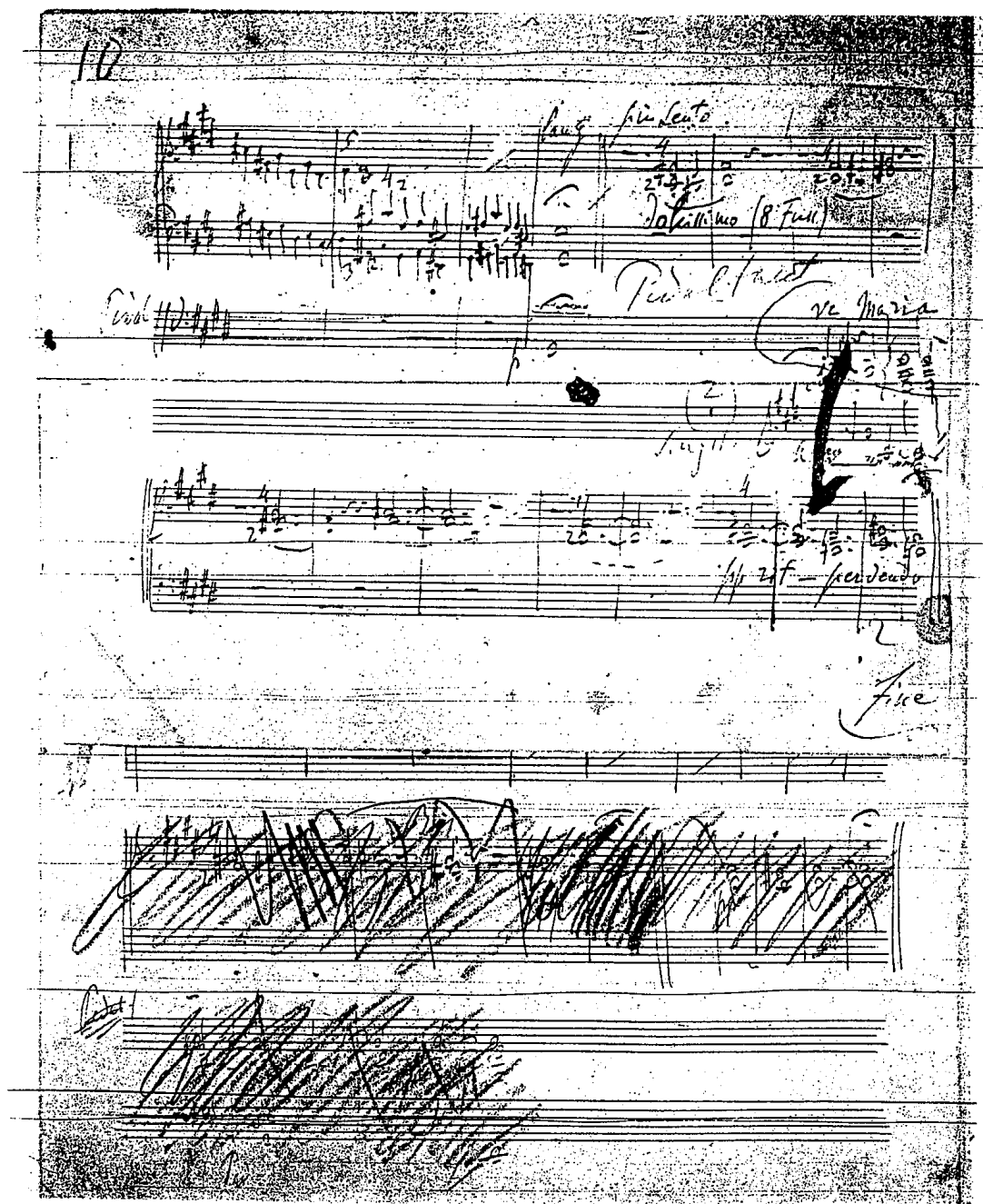
p

Pedal.

「任意の声楽とオルガンまたはハルモニウムのため」の《婚礼（アヴェ・マリア III）》冒頭 20 小節（旧全集から）

F. リストの忘れられた《婚礼》

譜例 2



自筆譜 “GSA60/R7” から第「10」頁

(ゲート・ウント・シラー・アルヒーフの許可のもと掲載)

頁の上半分に張り付けられた紙に、リストは新たなコードを書いている。

譜例 3

ANNÉES DE PÈLERINAGE

Deuxième Année – Italie

1. SPOSALIZIO

Andante

p

dolce

5

mf

9

ppp

dolciss.

una corda

13

poco a poco più di moto

《巡礼の年第2年イタリア》第1曲《婚礼》[ピアノ独奏稿] 冒頭16小節
(新全集から)

F. リストの忘れられた《婚礼》

譜例 4

Handwritten musical score for the song "The Rose Tree". The score is written on three systems of three staves each. The first system includes a treble clef, a key signature of one sharp (F#), and a 4/4 time signature. The melody is written on the top staff, and the accompaniment is on the bottom staff. The second system continues the melody and accompaniment. The third system concludes the piece with a final chord and a double bar line. The handwriting is in ink on aged, slightly stained paper.

“GSA60/Y2” から第 2 頁

(ゲート・ウント・シラー・アルヒーフの許可のもと掲載)

上2つの3段譜表はゴットシャクルによる。その最後の2小節を削除して、新たにリストが8小節を書き込んでいる（一番下の3段譜表）。

譜例 5

a ハーゼルベック版のコーダ部分

180 *Più lento*
Altstimme Solo

(8) *dolcissimo*

Pedal tacet

187 *ossia: rit.*
A - - - ve Ma - ri - al

pp rit. perdendo

b “GSA60/R7.1”, “GSA60/S13”, “GSA60/S13.1” のコーダ

139 Solo

A - - - ve

rit.

c “GSA60/R7” (譜例 2) から筆者が読み取ったコーダ

Solo
Singstimme

139

A - - - ve Ma - ri - al

pp rit. perdendo